

アーキテクチャー
保健・医療・福祉

アルペンリハビリレッジ

医療法人社団アルペン会

アルペンリハビリテーション病院

通所リハビリテーション あいの風

藤田 修功

From Hospital

室谷 ゆかり

病 院

第68巻 第12号 別刷
2009年12月1日 発行

医学書院

アルペンリハビリレジ

医療法人社団アルペン会
アルペンリハビリテーション病院
通所リハビリテーション あいの風

● 藤田 修功 株式会社アーキデザイン研究所
代表取締役

ロケーションと施設概要

富山市街地にほど近い風光明媚な田園風景を残す計画地は、北アルプス立山連峰を遠景にかえ、雄大な山々が語りかける。春夏秋冬の四季の変化を感じさせるこの地は、日本海にも近く、名所旧跡や文化芸術施設・温泉にも恵まれた地である。

施設は、大きく分けて、外来および60床の病棟を持つリハビリテーション病院ゾーンと、料理を楽しむ「ダイニング・キッチンエリア」、リビングルームや食堂・厨房から成る「ぬく森ホール」、リハビリをサポートする「マシンエリア」、趣味の教室となる「園芸室」「木工室」「陶芸室」等を持つ通所リハゾーンの2つの施設で構成されている。

計画とコンセプト

豊かな住環境と多用途な複合施設を融合させるしかけとして、「みち」「街路」空間を創り、「センターガーデン」を中心に必要な生活空間を配置することで、全体で1つの生活単位である「村」「コミュニケーションビルレジ」を考え、実生活に根ざしたりハビ村の提案を試みた。

独自のみち空間として、四季の変化のあるみち、憩い園樂のあるみち、



正面外観

太陽のあるみち、風のあるみちを積極的に演出することで、内外に向けたオープン化の動的空間と、プライバシーが必要な静的空間のエリア分けが図られている。

●しかけその1：歩いて行きたくなる場所をつくる

センターガーデンを中心に曲がりくねった「みち」に配された展望テラス、散歩運動広場的な回廊や渡り廊下、趣きの異なる2つの中庭とホール、アトリウム広場、音楽や娯楽を楽しむ屋外ステージや多目的室、工作や物創りの木工室、焼き物を楽しむ陶芸室、土いじりや菜園を楽しむ園芸室、病棟内に設けた7か所の憩いの広場等を計画した。

●しかけその2：地域住民とのコミュニケーション広場として

周辺地域住民との交流の場としてビルレジへのアプローチエリアに地域交流室を配し、センターガーデン

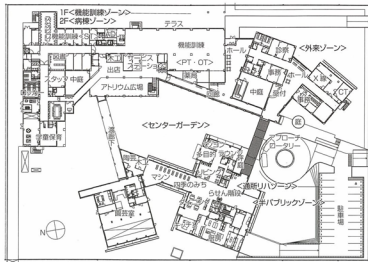
に面したリビングテラスや広場を介して、外部から人を招き入れやすくした。

●しかけその3：楽しそうな場所と景観を取り込む

みちゆく人々が遠くからビルレジに近づくにつれ、異なる角度に配置された建物が変化しながらセンターテラスを視線に捉えることで、楽しそうな場所を感じさせる演出をした。また、全室個室の病棟や食堂は、北アルプスの山並みを眺める2階に集約し、素晴らしい借景をなるべく各病室に取り込み、入居者に安らぎと活力を感じてもらえる配置とした。

●しかけその4：人が主役の人車分離と増築の未来形

アプローチエリアの一部とバックヤードゾーンを分離し、来場車・サービス車のゾーンを限定化することで、施設利用者が中心となる、人・車分離動線とした。また、将来



1階平面図

リハビリ訓練の行われる「動的空間」を1階に配置。外菜、通所リハ、半ブリックの各場所は外部から入りやすい場所に配置。歩いていきたくなる場を多設づくり、自分の気に入った場所を選択できるようにし出す

From Hospital

デザインには、人を動かす力がある

アルペンリハビリセンター 病棟 室谷 ゆかり

私たちは、以前77床の小規模病院で、地域の高齢者の方の長期療養をサポートさせていたしていました。2003年、回復期リハビリテーション病棟の「脳のご病気や骨折などを機に寝たきりになられた方を1人でなくし、ご自宅で再び生活されることを応援する」という目的に軸が動かされ、「地域のために自分たちの最大限の力を発揮するは？」ということを考えました。そして、病床を60床に減らし、「回復に向けて様々な機能を持つ」リハビリテーション病院と、「ご自宅での生活が生き生きとしたものになるようサポートする」通所リハビリテーション施設が、お互いに村のように協力する場所を作ろうと決めました。具体的には、何より設計が命です。

設計にあたりお願いしたのは、①北側の気候を察え、光がいっぱい入る明るい

雰囲気だ。どんな気候でもここへたすに前進できる(何かが壊れる)場合、壁障がいを持つ一方で、より豊かな人生を生きていきかきかえを促すことができる。②様々な方が集まり、いろいろなことにチャレンジでき、また患者さん、利用者さん、スタッフ、またそれぞれの家族も関わり、世代を問わず、村のような形で助け合っていく、生きていく、そのムードを作る場への設計です。

具体的には、まず、病気のために突然障がいを持つという、なかなかには受けとめきれないことに出合った患者さん。ご家族ができるだけの助けを出せるように、全室個室としました。療養も、生活動作が全てリハビリテーションとつながるように、車椅子で歩けなくても移動がままならない患者さんが通しやすいように、治療としての大きさと考え、手すりや家具

も、その方が使いやすい形で使えるようにと、配置を決めました。またトイレは、最初に1人でできるようなつくり、最もプライバシーを守りたい場所であるため、全ての個室に設置しました。その一方で、楽しみなお食事、作ったのにおいなども感じていただけるよう、パントリーを設け、食堂以外にも患者さんたちが集まって憩える広場を設けました。

2008年6月、私たちの思いがいっぱい詰まったアルペンリハビリセンター(＝リハビリ+ビルド)がオープンしました。動線はながり長いものとなりましたが、歩行距離が延びて、スタッフの腰痛も患者さんが減ったのは、嬉しい結果です。患者さん、ご家族も時間をかけて、様々な風景を楽しんでいらっしゃいます。まだまだこのビルドには、成長させていく余地が沢山あります。年月をかけて、スタッフとのリハビリテーションが育っていくのを楽しみにしています。



総合受付(上)と圖書室(下)



自然光にあふれる木材を多用している



「四季のみち」の途中で気軽にリハビリできる



ADL室のキッチン



ADL室には書棚もあ

的な時代の変化にも対応可能な増築にも配慮し、みちを増殖変化させることで比較的簡単に増築にに対応できる計画とした。

●しかその5：木造民家と現代建築の融合性から安らぎと力強さを引き出し、光と風を届け込ませる

通所リハビリセンター図書室は、大空間であるにもかかわらず、古民家を感じる大断面木構造のトラスシェルターから差し込む光の変化を感じさせながら、安らぎの「静」と大胆な木造トラスが見せる「動」から活力を感じさせる構法を計画し、自然素材の持つ「力」を生活の中に取り込む空間演出を形成した。

リハビリテーション 病院ゾーン

アプローチの車寄せロータリーは、歩道と分離し、1階のピロティーと

2階のガラス張りで透明感のある長閑なテラスを介して、来場者の視線が中心コアとなるセンターガーデンへと向けられるように計画した。

病院棟は、パブリックゾーンと一体感を持たせ、施設利用者・外來者・訓練者・スタッフ等の動きのある姿・気配が半透明的に感じられるようにし、お互いが日常的な動きの中でも「活力」を得られるような「生活の場」を意識した計画としている。

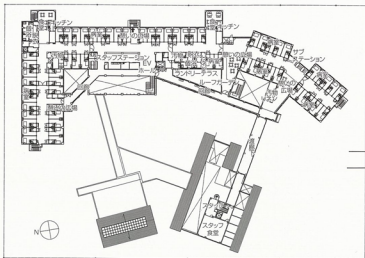
共有のパティオホールからは、病院と通所リハの動線が分かれ、病院棟は風除室を入ると、総合受付ホールと直結した待合広場となり、中庭ガーデンと外部ガーデンを見渡せ、外來・病院者の緊張を和らげる。

センターガーデン側の「回復形式」を介して外來ゾーンがある。来場者が迷うことなく自然に「みち」

に誘導されたその先には、アトリウム広場と趣きを異にした姿の待合広場が現われ、スタッフステーションとエレベーターホール・機能訓練ゾーンへと導かれる。そうしたスムーズな動線でありながら、単調になりがちな動線下から「散策のみち」の積極的な楽しさを回廊動線計画とした。

機能回復訓練室は、セミオープン的な配置を意識しており、開放的な明るさと必要プライバシーを確保するため、東側の田園風景を取りもよう配置し、パブリックゾーンとは回廊のみを緩衝帯としてレイアウトしている。

アトリウム広場は、中庭を介して機能的なスタッフゾーンと運動させており、サービス動線やスタッフ駐車場への出入口、学童保育ゾーンへと繋がっている。



2階平面図

病室群は住みよしの顔を整備し、落ち着ける「静時空間」を2階に展開。病室には山並みの借景を取り込む。全病室トイレ併置。浴室も併浴を多数設置してプライバシーを確保。様々なタイプの顔の広場を分散配置

2階の病棟ゾーンも1階と同じく周辺の田園風景を積極的に取り込むように、平面形を外に向けた任意の角度で構成した。「散策のみち」にポケットパーク的な中庭と吹き抜け、8つの異なる広場を設けて「街的」なる形態を持たせることで、人が集まる色々な広場に變化と社会復帰への活力を呼び起こさせるような平面計画を意図している。

各室は全個室型で、ほとんどの個室・広場・食堂から北アルプス連峰が眺められ、その他の病室は中庭などを介して浴室も含めてプライバシーを確保している。

スタッフステーションを病棟のセンターに配置することで、機能動線の簡略化・仕事環境の向上も計られ、吹き抜けを介して1階のアトリウム広場と一体化させることで、施設全体の「街並み」が目が行き届くように計画している。

アプローチ上部のガラス張りの展望テラスは、生活リハの憩いの場と

してオープンな空間でありながら、通所リハや厨房への生活動線も兼ねた多目的な空間としての意味合いも込めている。

通所リハゾーン

通所リハゾーンと病院ゾーンとは、センターガーデンを中心にした共有のアプローチパティオと回廊のみで繋がっている。通所リハは「四季のみち」をメインストリートにしつらえ、日常的な住環境を再現したリビングルーム+前庭+音楽室にもなる多目的室。食を楽しむキッチンに運動したダイニングルームや、美容容エステを兼ねるコーナー等が配されており、全てのゾーンがセンターコートや前庭・中庭と一体化した計画としている。

建物に自然の森を再考

「四季のみち」には、自然の森の

中を歩いているようなイメージを再考すべく、木造大断面トラスを森の「幹と枝」に見立て、上部のトップライトから光を入れて森の中に差し込む「太陽の木漏れ日」を連想させる「光と影」を演出している。

また、同様の効果を園芸室にも再現し、あたたかみ森の中の土いじり、草花の手入れ、野菜作り農園などの業園を兼ねることに演出している。このような「木構造」を目的に合わせた「脱構造」の考えは、未だに未開発な部分も多く、今後とも、人間の再現を呼び起こす1つの手法であることに確信と期待を持って可能性を探りたいと考えている。

四季のみちの一部にはマシンスペースがあり「通りすがり」に気軽に体を動かすことができる。その先には木工・陶芸室がセンターガーデンに面しており、渡りのみちと人間回廊の園芸室へと「みち」は延びている。



機能動線を簡略化したナースステーション



廊下一病室には借景が割り当てられている



病室は全個室トイレ付き



回廊(上)と中庭(下)



光あふれるアトリウム広場

おわりに

当計画は、コスト的にも非常に厳しい条件の中で試行錯誤の連続で

あったが、密度の高い施設として最終形を見られたことは、病院スタッフと関係者の協力によるものと感謝し、地域に根ざした施設として期待されていることを確信した。

志した しょうごう

株式会社アーキデザイン研究所 代表取締役：
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 8-3-32 丸
丸1-1-204

建築概要

名称	アルペンリハビリ	アコン+湿式水床病室	
病院名	アルペンリハビリテーション病院	給水 公共水道	
併設施設	通所リハビリテーション あいの風	給湯 中央式(ガス焚湯水ヒーター+貯湯槽)+局所式(ガス・電気)	
所在地	富山県富山市松木300番地	排水 建物内汚水・雑排水合流式	
設置主体	医療法人社団 アルペン会	消火 都市ガス(13A)底圧引き込み	
病床数	60床	消火 スプリンクラー設備・消防用水	
診療科目	リハビリテーション科	発電機 6.6KV 容量 変圧器容量1,380KVA	
設計監理	株式会社アーキデザイン研究所 藤田修司・石橋克哉	受電機 デンソービル用電機(15A1台)	
施工	建築・電気・衛生・空調：石川建設株式会社支社	エレベーター 運送用(1,000kg 15人1台)・乗用(750kg 11人1台)・奥用(300kg 9人1台)	
敷地面積	11,804.45㎡	建築面積	4,384.78㎡
延床面積	7,109.58㎡	高さ	11.56m
構造階数	鉄筋コンクリート造+大断面木構造、地上2階	電気	MDF 200P×1機、IDF×8機
(設・備)		ナースコール	総機100機壁掛型同時通話
空調	空冷ヒートポンプエアコン+ビル用マルチルーム	その他	TV・放送・日光灯・監視設備